

# 群雄割拠から天下統一へ



静岡大学教育学部教授 小和田哲男

## 1 強大な戦国大名の出現

応仁の乱は、京都を舞台に、11年間にわたって戦いが続いたが、京都での戦いが下火になるのとはほぼ時を同じくして、戦乱の火の粉は地方に飛び火し、それからおよそ100年間にわたる戦国時代を迎える。

一番小さい戦国大名といえば、二つか三つの郡を支配した程度の大きさで、一番大きな戦国大名となれば、一時の毛利氏のように、10か国を支配するような強大な戦国大名も登場している。

では、どうして、そのような強大な戦国大名が出現してくるようになったのだろうか。この答えは簡単ではないが、一つの理由として考えられるのは、のちに戦国大名の家臣にくみこまれていく在地領主たちの意識というものに関係していたことはまちがいない。

一例をあげておこう。近江の戦国大名浅井氏あざいが生まれてくる理由の一つとして、在地領主間の紛争を浅井氏が裁定しているというケースがある。当時、水不足からくる水争いをはじめ、在地領主と在地領主との間で紛争が絶えなかった。ほぼ同じくらいの力をもった者同士ではなかなか解決できない問題が多く発生していたのである。

そのようなところに、同じ在地領主ではあるが、

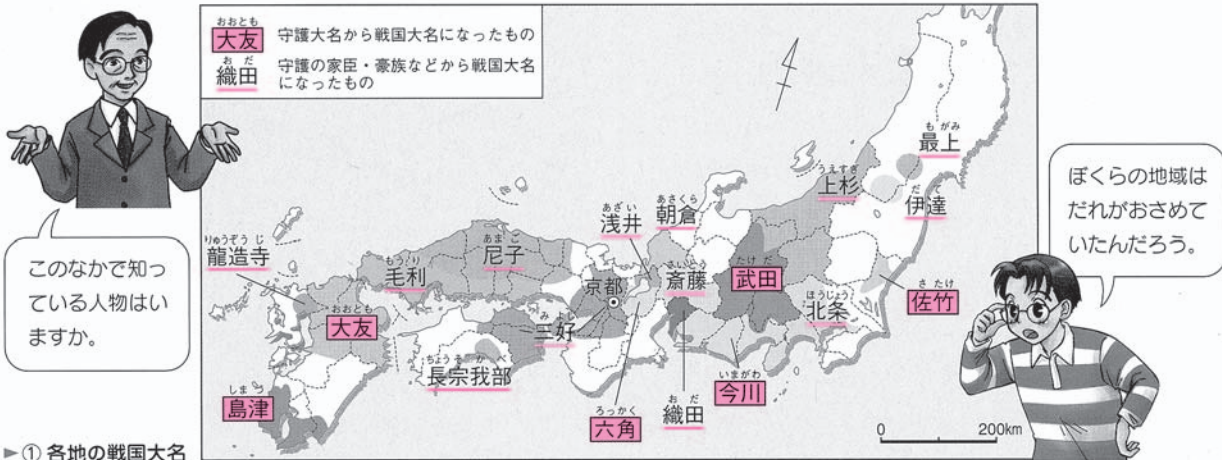
やや力の強い在地領主がいたとしよう。この場合、それが浅井氏である。浅井氏は、争っている両者の調停役として登場し、それを解決する。つまり、ドングリの背くらべ状態では解決できないことも、一段上の領主権力が介入することで解決できたのである。「戦国大名権力は、領主間の階級的結集によって生まれた」といわれるのはそのためである。

それは、単に争いの調停役というだけでなく、武田信玄の信玄堤の例のように、在地領主の支配領域ごとでは堤防を造っても効果がないのに、何人も在地領主の支配領域にまたがる堤防を造ることによって、洪水の被害が減ることに明らかで、在地領主によってかつぎ出されたという側面もあったことをみておかなければならない。

## 2 戦国大名はなぜ戦いあったのか

こうして、それぞれの地方を代表する強大な戦国大名が登場し、文字通り、弱肉強食の論理で、弱い戦国大名はしだいに淘汰され、いまの県でいえば、三つないし四つの県にまたがるような大きな戦国大名が出揃う形となる。

ふつう、ある程度の大きさになれば、「もうこれでよし、十分だ」と考えるところであろう。戦いにいければ、軍事費はかかるし、戦死者・負傷者などの犠牲も出るので、そう考えて当然である。し



▶ ① 各地の戦国大名



長篠合戦図屏風（帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.101）



天下布武

長である。

信長は、尾張一国を平定したあと、美濃、伊勢に領土を拡大し、敵対する戦国大名を次々に滅ぼしていった。戦国大名すべてを自分の傘下にくみこんでしまえば、もうお互い戦いあう必要はな

くし、戦国大名たちはそうしなかった。戦いに勝てば、また、つぎの戦いを仕掛けていったのである。それはどうしてなのか。

これは、当時の部将たちの意識のあり方から説明しないとわかりにくいかもしれない。実は、戦国時代の主従関係は、江戸時代のそれとくらべて、きわめてドライだったことと関係する。江戸時代には、武士の道徳として「武士は二君にまみえず」というものがあった。つまり、武士たるもの、一度仕えた主人に一生仕えるのが武士としての道であるというものである。それに対し、戦国時代の武士は、生き残るために、強い主君についていかなければならない。弱い主君についていたのでは家を滅ぼすことになってしまうからである。それは、「強い者になびく」という考え方につながる。

強い主君について、恩賞をもらい、家を存続させるというのが、当時の部将たちの思いであった。したがって、主君である戦国大名は、常に他領を侵略し、得た土地を家臣たちに恩賞として与えなければならなかった。これが、戦国争乱がいつまでも果てることなく続いた最大の要因である。

### 3 織田信長の「天下布武」

そうした悪循環は、いつかは誰かが絶ち切らなければ永遠に続くことになる。戦国大名の中に、それに気がついた者があらわれた。それが織田信

長と考えたのである。

そして、その過程で信長がもち出した論理が有名な「天下布武」のスローガンであった。ただ、この「天下布武」を、よくいわれているように、「武力でもって天下を取ってやろう」という意味にとらえていると、信長の本当のねらいがみえてこなくなるおそれがある。信長の「天下布武」の真のねらいは別のところにあった。

「天下に武を布く」とは、武家だけが天下の権を握るという意味である。よくいわれるように、中世という時代は、公家と武家と寺家の三つの権門が、お互い補完しあいながら支配権力を形づくっていた。公家は朝廷権力のことなので問題はないが、最後の寺家はわかりにくいかもしれない。要は、寺社勢力のことである。

つまり、信長の「天下布武」というスローガンは、公家と寺家を排除した、武家だけによる政権を樹立したいというものであった。そして、比叡山延暦寺の焼き討ちと、石山本願寺との戦いで、寺家つぶしにある程度成功した。そこで、いよいよ、つぎの公家つぶしに動いたとき、家臣明智光秀の謀反によって、京都の本能寺で殺されてしまい、「天下布武」も、天下統一も実現しなかつた。

### 4 豊臣秀吉の果たした役割

信長横死後、信長が果たせなかつた夢を実現し

たのが秀吉だった。しかし、秀吉は、天下統一路線はうけついでそれを成功させたが、信長の「天下布武」はうけつがなかった。よく知られているように、秀吉は、征夷大將軍ではなく、関白という立場で、全国の戦国大名の上に立とうとし、事実、そうになっている。

歴史上先例が全くない武家関白というわけで、秀吉が出した「惣無事令」は、関白としての秀吉が、天皇に代わり、全国の大名たちの合戦をやめさせるという論法で、戦国大名同士の戦いに介入しはじめたのである。1587年の九州攻め、1590年の小田原攻めは、まさにこの「惣無事令」の執行であった。

こうして、小田原の北条氏が滅亡したことにより、戦国大名がいなくなった。国内における領土拡張戦としての戦いは終息した。「惣無事令」が「豊臣平和令」などとよばれるのはそのためである。

秀吉はまた、太閤検地や刀狩りによって身分制支配を強化してゆき、このことが、のちの江戸時代の身分制社会の原点となるわけで、徳川幕藩体制のしくみは、秀吉の時代にはじまっていることは明らかである。その意味での秀吉の果たした歴史的役割はきわめて大きかったといえる。

しかし、秀吉にも限界があった。秀吉は、それまでの天下統一の過程の戦いで、敵対した者を滅ぼし、手柄のあった大名にその土地を恩賞として与えてきたが、北条氏を滅ぼし、天下統一が成っ

てしまったら、そのあと、与える土地がなかった。

そのとき、秀吉が考えたのか、側近の誰かの入れ知恵だったかわからないが、「まだ手つかずの土地があるではないか」ということになった。それが朝鮮だったのである。こうして、秀吉の二度にわたる朝鮮出兵が敢行され、それが豊臣政権の屋台骨をゆるがす結果となり、つぎの徳川家康へとバトンタッチされることとなる。

## 5 「織田がつき羽柴がこねし天下餅…」

江戸時代の狂歌に、「織田がつき羽柴がこねし天下餅、すわりしままに食うは徳川」というものがある。信長・秀吉・家康の三者三様の役割をいったものであるが、ただ家康は棚からボタ餅のように、座して政権を手に入れたわけではない。

家康は家康で、先輩たちの良いところ、悪いところをじっくり学び、その良いところを伸ばしているのである。

豊臣政権の失敗として、海外侵略が最大のものであるが、家康は、そのあと、朝鮮との国交を回復している。

また、織田政権は、本能寺の変で完成した姿をみせなかったのが、窮極的にどのような支配形態をもくろんでいたのかわからないが、「天下布武」の原点にもどることを学んだ。関白として公家政権に包摂された失敗をみて、家康自身は、武家政権のオーソドックスなあり方として、征夷大將軍を望んだのである。

